The perianth-cells of *Plectocolea* are based upon the tissue within "epidermis", while those of *Jungermannia* based mainly upon "epidermis".

The above view of leaf, bract and perianth with reference to the differenciation of stem-tissue may be applied to the other genera belonging to *Jungermanniales*, and will put forth some knowledge useful to taxonomy. For example, the vitta in the leaves of *Diplophyllum albicans* (L.) Dum. and the the tissue ocelli in the leaves of *Frullania moniliata* (R. B. N.) Dum. are derived from inside of "epidermis" of stem.

○カラコギカヘデから目藥を作る（佐藤邦彥）

筆者の郷里山形縣西村山郡白岩町大字田代に於て古來モンジュと呼ばれる樹の葉から粉末の目藥を作つて居る。然し此頃では老人達の間に僅かに傳つて居るに過ぎない。このことを祖母より聞き原植物を見てカラコギカヘデなることが分つた。この樹は當地には稀なものである。其の藥の製法は舊曆五月の節句にその葉をこき採つて來て大きな鍋で茹でて，次に鍋を火より下して其のまゝ冷やし茹でた葉を鍋の茹汁の中で充分揉む。而して此の液を濾過して暫らく放置すると其の底に澱粉の如き沈澱物を得る。次に水を去つて之を乾燥すると灰白の澱粉樣粉末を得る。この粉末はたゞれ目，あせも，またずれ等につける。皺だらけの老婆が眞赤にたゞれた目のまはりに白い粉をつけた樣は誠にこつけいな樣だそうである。カヘデの一種たる本種が目藥になることは他種メグスリノキと關聯して興味あることである。

○カラコギカヘデ *Acer Ginnala* Maxim. の葉の成分（今關和泉）

佐藤氏が上文に添へて當研究會宛送られた資料は，無味無臭の灰白色微細な輕い粉末で，ヨードヨードカリ液に依る澱粉の反應はなく，鹽化第二鐵液に藍黑色を呈しタンニンの反應は極めて鋭敏である。又タンニンの生成に密接な關係を有するフラボン配糖體の呈色反應即ち 20% 苛性カリ液を滴下すると黃赤色を呈し其の存在を認める。此等は何れも明らかにタンニン系の成分を含有してゐる事が分る。

Perkin 及び Uyeda (Journ. Chem. Soc. 1922. 66.) 兩氏に依る朝鮮產の乾燥葉の分析結果に依れば，タンニン，14.5%，水溶性物質，23.1%，不溶性物質，51.3%，水分，11.1%で且アルカロイド，サポニン，揮發油等は含有して居ない。そのタンニンは結晶性のアーセルタンニン及び無晶形のタンニンを含有し，又何れもタンニンの生成に關係ある微量のエラーグ酸，並びにフラボン配糖體のクエルセチンを認めた他，カテコールタンニンの痕跡が檢出されてゐる。

採集時期，製法等に依り成分含量に多少の變化はあるが，その主要成分は此等タンニン系のものである事は間違いない。恐らくその收斂性を利用したものと思はれる。その他に特異な生理作用を呈する成分は含有してゐない。近緣のメグスリノキ *Acer nikoense* Maxim. も同樣の結果が言はれるのではなからうか。なほ上記文獻に依れば朝鮮には廣く分布して居り，仲秋の頃葉を小枝と共に採集乾燥して中國に輸出してゐる。中國では綠礬を媒染劑として木綿類の黑色染料に，又皮革を鞣すのに使用されてゐるが，その効果はあまり良好ではない樣である。（東京大學醫學部藥學科生藥學教室）